

ルカによる福音書 24 章 「聖書の全てを信じる」

1A 思い出す 1-12

2A 聖書を説明する 13-35

3A 心を開く 36-53

本文

ルカによる福音書 24 章を見ていきます。私たちは前回、キリストの十字架を見つめました。そこにあるイエス様の御父との関係、その絶対的な信頼に支えられて、主はその苦しみの中でもご自分の使命を全うされました。それは父なる神の愛をもって罪人である彼らを愛したことです。そして、復活に入ります。ここでは、希望を知ることができるでしょう。イエスが復活したという事実が、信者にいかに希望を与え、喜びを与えるか、それを見ていきたいと思います。

1A 思い出す 1-12

24:1 週の初めの日の明け方早く、女たちは、準備しておいた香料を持って墓に着いた。

この文は、23 章の最後の文の続きになっています。「安息日には、戒めに従って、休んだが、週の初めの日の明け方早く、女たちは、準備しておいた香料を持って墓に着いた。」となります。したがって、ルカは、十字架の記事のあとにすぐ、復活の出来事を描いています。それは、復活なしに十字架の話しを記しても意味がないからです。復活がなければ、それは福音、よい知らせではありません。パウロが言いました。「キリストが復活されなかったら、私たちの宣教は実質のないものであり、あなたがたの信仰も実質のないものになるのです。(1コリント 15:14)」しかし、ここに出てくる女たち、また使徒たち、弟子たちは 23 章における事実までが事の全てだと思っていました。そのために彼らは悲しみの中に、落胆の中に沈んでいました。

女たちは、明け方早く、墓に来ていますが、夜明けのことです。香料をもって埋葬の続きをしようと思っていました。当時は、遺体は洞窟でそのまま安置して、骨になるまで置いておき、それから骨壺に入れるという順番を使っていましたが、その遺体から腐乱する臭いを和らげるために香料を使います。安息日のために、そこまでの作業ができなかったのです。この女たちは、イエス様の十字架も、遠くからですが見ていた人々です。彼女たちは、日常の具体的な必要について、イエス様にまた弟子たちに仕えていました。主を愛していたがゆえ、これらのことを行なっていました。まだ夜明けなのに、すぐに香油と香料を持ってきたのも、そのためです。しかし、その行動の中で、自分たちが途方に暮れる出来事が起こります。

24:2 見ると、石が墓からわきどころがしてあった。

当時の墓は、洞窟の入り口に石を転がします。ユダヤ人指導者たちのほうが、イエスの言葉をそのとおり受けとめていました。マタイによる福音書によると、イエスが復活すると言っていたから、弟子たちがその体を盗み出し、イエスが甦ったというかもしれないと総督ピラトに申し出ていたのです。それで番兵を付けて、見張らせました。ところが、石が転がしてあります。マタイによると、御使いが来て、大地震があり、その石を転がしてその上に座ったからです。女たちは、その石は重いから誰が転がしてくれるか、と話し合っていたところでした。

24:3 はいって見ると、主イエスのからだはなかった。24:4 そのため女たちが途方にくれていると、見よ、まばゆいばかりの衣を着たふたりの人が、女たちの近くに来た。

2 - 4 節には、「見る」という言葉が3回繰り返されています。女は、石がころがしてあるのを見ました。そして、イエスの体がなかったのを見ました。これは紛れもなく、キリストが甦られた事実を示しています。ですから喜ぶべきはずなのに、逆に、「途方にくれてい」ます。つまり、彼女たちは目で見てはいるが、本当の意味では見ていなかったのです。

私たちにも、そのようなことが起こります。ある出来事を見てはいるけれども、見ていない。神が意図されているように見ていない。そのため、この女たちのように途方にくれ、行きづまってしまうのです。けれども、3回目に出てくる「見る」という言葉は、「見よ」という呼びかけ、命令形になっています。本当に見なさい。神が意味しておられるように見なさい、という呼びかけです。

24:5 恐ろしくなって、地面に顔を伏せていると、その人たちはこう言った。「あなたがたは、なぜ生きていて死者の中で捜すのですか。24:6 ここにはおられません。よみがえられたのです。まだガリラヤにおられたころ、お話しになったことを思い出さない。

この二人は天からの使いですが、なぜ二人いるのかと言いますと、律法では二人か三人の証人によって、事実と認められるという掟があるからです。イエスが甦られたことを、一人ではなく二人の御使いが証言しています。そして、聖書の他の箇所にあるように、天からの使いの前では神の栄光を反映しているので、その聖い臨在の前で恐れおののいています。

死者の中にイエスを捜す、つまり、死んだ方に仕えようとしていたのです。これは、聖書の中で禁じられていることでした。死んだ者に仕えてはいけません、生きて神に仕えています。しかし、女たちには自分たちの希望であったイエスが死んでいました。だから、そのまま死んだその体に仕えていたのです。復活の信仰、神が生きていて忘れた信仰は、このようにして偶像礼拝と変わらないことをしてしまっています。

そして、復活の事実の核心部分を、端的な言葉で言い表しています。「ここにはおられません。よみがえられたのです。」今、イエスが葬られた墓があります。可能性として、聖墳墓教会とゴードン

のカルバリーと呼ばれている園の墓です。しかし、そこに私たちの主イエスはおられません。園の墓には、「ここにはおられません。よみがえらえたのです。」という看板がかかっています。主は、今生きておられます。(例:レーニンの遺体への行列。)

24:7 人の子は必ず罪人らの手に引き渡され、十字架につけられ、三日目によみがえらなければならない、と言われたでしょう。」

イエスは、主にガリラヤで活動されていました。病人を直し、悪霊を追い出され、恵みのことばを語られました。弟子たちの心は期待と希望に満ちあふれ、イエスのみことばを自分たちの心にたくわえていたのです。そのことを思い出し、そこで主は十字架に付けられても三日目によみがえると言われていました。

24:8 女たちはイエスのみことばを思い出した。

ここで女たちはピンと来ました。あのイエスは、過去の方ではない。まだ生きておられるのだ、ということに気づいたのです。彼女たちがとらえていた十字架は、失望以外の何物でもありませんでした。彼らが考えていた神のご計画とは、まったく違うことが起こったのです。しかし、真実は逆でした。罪人に引き渡されることと、十字架につけられることは、神が予め定めておられたことであり、今や、それが実現したことを確認できるわけです。復活の約束によって、初めてこのむごたらしい十字架の出来事、失望でしかなかった十字架が実は神の深い御旨の中で起こったことを見ることができました。

そしてみことばを思い出すことによって、途方にくれていたのが、喜びに満たされました。イエスのみことばを思い出すだけで、彼女たちの心が生き返ったのです。これが、復活のキリストにお会いする第一歩です。私たちの、実際の生活の中で、聖霊が神のみことばを思い起こさせてくださいます。イエスは、「聖霊は、わたしがあなたがたに話したすべてのことを思い起こさせてくださいます。(ヨハネ 14:26)」と言われました。その瞬間に、私たちは、生けるキリストに出会うことができるのです。

24:9 そして、墓から戻って、十一弟子とそのほかの人たち全部に、一部始終を報告した。24:10 この女たちは、マグダラのマリヤとヨハンナとヤコブの母マリヤとであった。彼女たちといっしょにいたほかの女たちも、このことを使徒たちに話した。

こんなすごい話しを、他の人に、とくに使徒たちに話さないではいられなくなりました。一部始終を報告しました。これが、福音宣教の原型です。福音宣教は、こんな良い知らせはないと思って他の人々に伝えることです。

24:11 ところが使徒たちにはこの話はたわごとと思われたので、彼らは女たちを信用しなかった。

ここの「たわごと」は、気がおかしくなった人に使われる言葉です。ですから、女たちは気が変になったのだと考えました。こうして、彼らは信じませんでした。あまりにも失望してしまい、落胆してしまい、もう信じるのが恐くなったのです。信じることで傷ついた彼らは、もうこれ以上傷つくたくないという気持ちがあったのでしょう。もう一つ、女たちが言っていたということがあります。当時、女たちは今以上に見下げられていました。しかしルカは、女たちが神に用いられている姿を他の福音書以上に描いています。主は女を用いられる、この心に私たち男は気づかないといけません。

24:12 [しかしペテロは、立ち上がると走って墓へ行き、かがんでのぞき込んだところ、亜麻布だけがあつた。それで、この出来事に驚いて家に帰った。]

ヨハネによる福音書によると、このペテロといっしょに行ったのがヨハネです。ヨハネは信じましたが、ペテロはただ驚いているだけで、その状況をまだ把握していません。

2A 聖書を説明する 13-35

ここまでが女たちの証言です。次に二人の弟子たちの証言があります。

24:13 ちょうどこの日、ふたりの弟子が、エルサレムから十一キロメートル余り離れたエマオという村に行く途中であった。24:14 そして、ふたりでこのいっさいの出来事について話し合っていた。

彼らは、エルサレムを離れています。そして、イエスが十字架につけられたことについて話し合っています。彼らは、この女たちの証言があつたのにもかかわらず、失望し、エルサレムにいる必要を見失いました。エルサレムというのは、神の国が立てられるときの都であります。多くの神の約束がエルサレムに対してなされています。そのエルサレムを離れ、どこか分からないところに行くということは、神への希望や信仰を失って、さまよい始めていることを示しています。私たちの心にも、それぞれエルサレムがあります。そして、ふたりの弟子のように、そのエルサレムからさまよい出ることがあるのです。

24:15 話し合ったり、論じ合ったりしているうちに、イエスご自身が近づいて、彼らとともに道を歩いておられた。24:16 しかしふたりの目はさえぎられていて、イエスだとはわからなかった。

この日は、過越の祭りが終わったばかりなので、他にも多くのユダヤ人が故郷に帰るために歩いていたかもしれません。イエスは、その歩いている人たちの中に入って来られました。イエスは、この落胆した二人に近づいてくださっています。

目がさえぎられるのは、彼らが不信仰だったからです。イエスは目の前におられるのですが、自分が見えないのです。まさにこの不信仰に、世の神である悪魔は働き、キリストの栄光を見せなくさせています。「2コリント 4:4 そのばあい、この世の神が不信者の思いをくらませて、神のかたちであるキリストの栄光にかかわる福音の光を輝かせないようにしているのです。」私たちは、希望を失い、これから行くべき方向がわからないと、神はどこかに行ってしまったと感じてしまいます。しかし、真理は逆です。自分が神から離れて行き、神は近づいて来られているのに、それが見えないのです。

24:17 イエスは彼らに言われた。「歩きながらふたりで話し合っているその話は、何のことですか。」すると、ふたりは暗い顔つきになって、立ち止まった。

皮肉ですが、イエスが死んでしまったと思っている弟子たちに、生きている主が語られています。このようなことはしばしば起こっているでしょう、主が生きているからこそ起こっているのに、そうではなく落胆している私たちの姿であります。暗い顔つきになっています。これが十字架という事実で話が終わってしまっている人々の姿です。

24:18 クレオパというほうが答えて言った。「エルサレムにいながら、近ごろそこで起こった事を、あなただけが知らなかったのですか。」

あなた、もぐりですね、ということです。ユダヤ人が過越の祭りに参加し、イエスが十字架につけられた事を見聞きしていました。

24:19 イエスが、「どんな事ですか。」と聞かれると、ふたりは答えた。「ナザレ人イエスのことです。この方は、神とすべての民の前で、行ないにもことばにも力のある預言者でした。24:20 それなのに、私たちの祭司長や指導者たちは、この方を引き渡して、死刑に定め、十字架につけたのです。24:21a しかし私たちは、この方こそイスラエルを贖ってくださるはずだ、と望みをかけていました。

イエスについての紹介がみな、「でした。」という風に過去形になっていることに注意してください。まず、行ないに力のある預言者であったと紹介しています。病人をいやす、悪霊を追い出す、5千人に給食を与える、水の上を歩かれる、こんな力強いわざをした預言者はだれもいませんでした。そして、ことばにも力がある預言者でした。イエスは、正しい方でした。でも、罪に定められたのです。そしてイスラエルの贖い主として望みをかけていました、となっていますね。だから、今は望みをかけていないのです。そして、このイスラエルの贖いは、栄光に輝く神の国の設立であります。争いがない。不正がない。荒野は緑地に変えられる。神の正義と平和が支配している国であります。それを期待していたのに、起こらなかったということです。

24:21b 事実、そればかりでなく、その事があってから三日目になりますが、24:22 また仲間の女

たちが私たちに驚かせました。その女たちは朝早く墓に行ってみましたが、24:23 イエスのからだが見当たらないので、戻って来ました。そして御使いたちの幻を見たが、御使いたちがイエスは生きておられると告げた、と言うのです。24:24 それで、仲間の何人かが墓に行ってみたのですが、はたして女たちの言ったとおりで、イエスさまは見当たらなかった、というのです。」

ここまで状況証拠が揃っているのに、まだ悟れていません。イエスが生きておられることは、これらの証言から十分に推測できることです。しかし、私たちは落胆しているとき、正確に物事を見ていく能力まで失われてしまうのです。

24:25 するとイエスは言われた。「ああ、愚かな人たち。預言者たちの言ったすべてを信じない、心の鈍い人たち。24:26 キリストは、必ず、そのような苦しみを受けて、それから、彼の栄光にはいるはずではなかったのですか。」

主は叱責されます。「愚かな人たち」と言われます。これは箴言に出てきました、知恵ある者に対比して愚かな者が出てきます。これは主が命令しておられるのに、何度となく語られているのに、応答していない姿です。心の鈍さを表しています。

主が語られている中での強調点は、「すべてを信じない」です。全く信じていないということではないのです。彼らは聖書を信じていたのです。けれども、全てを信じることをしませんでした。ここが、今でも生きておられるキリストに出会うか、そうでないかの分岐点になります。私たちも、福音主義の教会にいる人々なら、聖書をみな信じている、神のみことばだと信じていると言います。しかし、実際の生活において信じているかどうかは、また別であります。私たちは、ある聖書の箇所だけを信じて、自分の思いの中で、勝手にキリスト像を作り上げてしまいます。キリストはもっと、ずっと大きい方なのに、自分が信じやすいようにキリストのイメージを作り上げてしまうのです。弟子たちの場合は、栄光に輝く王の姿でした。それ自体は正しいのですが、それからローマ帝国を倒す軍事的な王というイメージを描いていたのです。ですから、聖書の箇所を一部だけ信じることは、生きているキリストを見えなくさせます。生ける神との関わり合いをなくしてしまいます。

彼らが見逃していたのは、キリストの苦難についての預言です。詩篇22編、イザヤ書53章、ダニエル書9章26節などの預言、キリストが苦しまれる部分は数多く書かれています。それを経て、父なる神のところに座し、すべての主権、力、高く上げられた名を持つ栄光の中に入られるのです。

24:27 それから、イエスは、モーセおよびすべての預言者から始めて、聖書全体の中で、ご自分について書いてある事がらを彼らに説き明かされた。

イエスご自身が、ご自分についての聖書講解をされています。「説き明かす」というのは、聖書本文をそのまま、単純に説明していくことです。このモーセは、モーセ五書のことです。創世記な

ら、「女の子孫」、ノアの箱舟、アブラハムがイサクをささげるところ、ヤコブが戦った主の使いなど、いろいろあります。そして、出エジプト記なら、過越の小羊、幕屋などがあります。レビ記の動物のささげものもキリストを指し示しています。聖書全体を通しての説明がなされました。

それで、先ほどの女たちと同じように、彼らの心は生き返るのです。したがって、私たちが生けるキリストに出会いつづけるには、聖書全体からの説き明かしが必要なのです。私たちは、一つだけの聖書の箇所にしがみついていると、自分自身で神のかたちを作り上げ、神の栄光がうすれていきます。しかし、聖書全体が説明されると、絶えず神の啓示が与えられるので、神の御姿が明らかになり、神の栄光をはっきりと見るようになるのです。

24:28 彼らは目的の村に近づいたが、イエスはまだ先へ行きそうなお様子であった。24:29 それで、彼らが、「いっしょにお泊まりください。そろそろ夕刻になりますし、日もおおかた傾きましたから。」と言って無理に願ったので、イエスは彼らといっしょに泊まるために中にはいられた。

彼らのほうから、無理にいっしょにいるように願いました。イエスはまだ先に行きそうであったのに、無理にいっしょに泊まらせました。求道の姿です。主と共にいたい、そして御言葉を聞きたい、こうした求める思いの表れです。イザヤは言いました。「主を求めよ。お会いできる間に。近くにおられるうちに、呼び求めよ。(55:6)」私たちが主に何かを示されたとき、その時に、無理にでも願うのであれば、生きたキリストと出会うことができるのです。

24:30 彼らとともに食卓に着かれると、イエスはパンを取って祝福し、裂いて彼らに渡された。24:31 それで、彼らの目が開かれ、イエスだとわかった。するとイエスは、彼らには見えなくなった。

イエスがパンを裂かれています。パン裂きは、親密な交わりの表れです。そして、ふつうパンを裂く人はその家の主人であります。つまり、このふたりは、イエスに主導権をおゆずりになったのです。私たちも、イエスに主人になっていただくとき、この方が私たちのうちに生きて働かれます。

24:32 そこでふたりは話し合った。「道々お話しになっている間も、聖書を説明して下さった間も、私たちの心はうちに燃えていたではないか。」

彼らの冷たい心が回復しはじめました。心が燃えています。これが聖書の説明を聞いている時の姿です。私たちは何か、イエスが復活されたことを実感するために、何か奇蹟みたいなことが起こることを期待します。しかし実は、主がもう生きておられるのにそれに気づかないことが多いのです。むしろ十字架の後にある復活、つまり死を意味しているところに命が芽吹きます。キリストの死を身にまとうことによって、その復活にもあやかることができるのです。ですから、聖書の説き明かしが必要です。その時に主に会えます。

ところでなぜ彼らは、イエスであると分からなかったのか？マルコ 16 章 12 節を読むと、「イエスは別の姿でご自分を現わされた。」とあります。イエス様が復活された後は、その前のと違う風貌をしていたようです。けれども、主の語り、そして何よりもパン裂きでこの方であることを彼らは知ったのです。私たちは、心にある偶像、目で見える形の姿に囚われてはいけません。むしろ、主がなされているところから、その働きからこの方を認める必要があります。

24:33 すぐさまふたりは立って、エルサレムに戻ってみると、十一使徒とその仲間が集まって、
24:34 「ほんとうに主はよみがえって、シモンにお姿を現わされた。」と言っていた。24:35 彼らも、道であったいろいろなことや、パンを裂かれたときにイエスだとわかった次第を話した。

彼らの信仰が復活しました。エルサレムから離れるのではなく、戻ってきました。そしてペテロも、その後にイエス様に会いました。それにこの二人が証言したのです。

3A 心を開く 36-53

24:36 これらのことを話している間に、イエスご自身が彼らの真中に立たれた。

そして、新改訳の脚注には、「そして彼らに言われた。「あなたがたに平安があるように。」」とあります。ヨハネ 20 章にも記されています。イエスはこの時をまっておられました。私たちの主が復活されたのだ、という合意が彼らの間にできるときを待っておられました。そして、話している間に真中に現われてくださったのです。教会が生きているか、死んでいるかは、この違いにあります。一人一人が生きたキリストに出会っていて、キリストが生きておられることを認めて集まるとき、教会のかしらとしてイエスが働かれるのです。

24:37 彼らは驚き恐れて、霊を見ているのだと思った。24:38 すると、イエスは言われた。「なぜ取り乱しているのですか。どうして心に疑いを起こすのですか。24:39 わたしの手やわたしの足を見なさい。まさしくわたしです。わたしにさわって、よく見なさい。霊ならこんな肉や骨はありません。わたしは持っています。」

40 節は脚注にあります、「イエスはこう言われてその手と足を彼らにお示しになった。」とあります。まだ、疑いを拭き去ることはできていないようです。もう信じてはいるけれども、疑っていたことによる恐れが影響して、イエスを霊であると誤解しました。感情は私たちをだまします。けれども、そのとき信仰にたって、神の真実を見つめることが大事です。そして、イエスは、彼らをとがめておられません。「なに、取り乱しているんだい。なにを疑っているのか！」と微笑みながらおっしゃっているような気がします。

イエスの手と足には、十字架につけられたときの釘の穴があったのでしょうか。イエスが再び地上に来られるときは、使徒行伝 1 章によると、同じ姿で戻られるので、その時も釘の穴の跡がありま

す。こういう歌があります。「手の釘と足の釘は、イエスがどれほど私を愛してくださったかを教えてくれる。天地が過ぎ去るとき、そのときも、その跡は残っている。永遠に、その跡は、神が私を愛してくださっていることを伝えるのだ。」

24:41 それでも、彼らは、うれしさのあまりまだ信じられず、不思議がっているので、イエスは、「ここに何か食べ物がありますか。」と言われた。24:42 それで、焼いた魚を一切れ差し上げると、24:43 イエスは、彼らの前で、それを取って召し上がった。

イエスには、きちんと体がありました。食べることもできる体です。消えたり、現われたりすることはできますが、私たちの肉体と同じように肉と骨があります。キリストがからだをもってよみがえられたのです。キリスト教の信仰は、思想や概念ではなく、まさしくイエスが生きておられるという事実を信じている信仰です。

24:44 さて、そこでイエスは言われた。「わたしがまだあなたがたといっしょにいたころ、あなたがたに話したことばはこうです。わたしについてモーセの律法と預言者と詩篇とに書いてあることは、必ず全部成就するということでした。」

再び強調されています、「必ず全部成就する」ということです。私たちの個人の信仰生活において、また教会の生活において主の言葉が必ず成就する、全てがそうなのだという信仰を持っているかそうでないかで、その人が復活信仰を持っているかどうかが決まります。

24:45 そこで、イエスは、聖書を悟らせるために彼らの心を開いて、24:46 こう言われた。「次のように書いてあります。キリストは苦しみを受け、三日目に死人の中からよみがえり、24:47 その名によって、罪の赦しを得させる悔い改めが、エルサレムから始まってあらゆる国の人々に宣べ伝えられる。24:48 あなたがたは、これらのことの証人です。

イエスが、彼らの心を開かれました。これが大切です。私たちが聖書を理解するのに、神が私たちの心を開いてくださらなければ、決して理解することができません。私たちはいつも、祈る必要があります。聖霊が私たちに、神のみことばを説き明かしてくださるように願うことが必要です。これで、彼らに心の疑いのいっさいが取り除かれました。

そしてキリストの苦しみとよみがえりというのは、「罪の赦しを得させる悔い改め」をもたらすのだと言っています。人はすべて罪を犯した、けれどもキリストの十字架が罪の赦しを与え、そしてその確証を復活によって与えてくださった。そして神に悔い改めることによって、その赦しを得られる、という内容です。この福音があつて初めて、弟子たちが先に話していたイスラエルの贖い、神の国の到来が意味を持ちます。

24:49 さあ、わたしは、わたしの父の約束してくださったものをあなたがたに送ります。あなたがたは、いと高き所から力を着せられるまでは、都にとどまっていなさい。」

聖霊の力を受けるまで、エルサレムにとどまりなさいという命令です。これは使徒行伝の1章にも書かれていますが、使徒行伝もルカが書いたことを思い出してください。使徒行伝の1章1節には、こう書かれています。「テオピロよ。私は前の書で、イエスが行ない始め、教え始められたすべてのことについて書き、お選びになった使徒たちに聖霊によって命じてから、天に上げられた日のことまでに及びました。」今、読んだ、「前の所」というのがルカの福音書です。だから、ルカの福音書には続編があり、それが使徒行伝なのです。

24:50 それから、イエスは、彼らをベタニヤまで連れて行き、手を上げて祝福された。24:51 そして祝福しながら、彼らから離れて行かれた。

ベタニヤはオリーブ山の東の山麓にある小さな村です。そこでマリヤとマルタがイエスをお迎えして、マリヤが主の言葉を聞いたところです。主にとって個人的に親しみのあるところだったのでしよう。そうした個人的なところに連れて行き、そこから昇天されました。主の働きは、十字架と復活だけでなく、先におるべきところ、永遠の父の右の座の位に戻ることです。これによって、この方にあらゆる名にまさる名が与えられました。天と地にあるいっさいの権威が与えられています。この方の名の権威によって、教会は力強く前進します。

24:52 彼らは、非常な喜びを抱いてエルサレムに帰り、24:53 いつも宮にいて神をほめたたえていた。

ルカの福音書は、非常な喜びを抱いて、神をほめたたえてことで終わっています。では初めのことをおぼえていますか。ガブリエルは、「喜びのおとずれ」といい、マリヤもザカリヤも、それぞれ大喜びで、神をほめたたえました。したがって、福音書は喜びと賛美で始まり、そして、喜びと賛美で終わるのです。だから、「福音」の書物なのです。この福音の中に生きるのが私たちの務めです。